

# 水辺の 生物



## アメリカザリガニ

アメリカザリガニ科アメリカザリガニ属

写真提供および校閲：岐阜県世界淡水魚園水族館  
アクア・トトぎふ

ザリガニの仲間は胸に5対の歩脚をもち、第一歩脚のハサミがカニのそれと似ているためカニという名があるが、実はエビの仲間である。日本に生息するニホンザリガニ、ウチダザリガニ／タンカイザリガニ、そして本種の計3種のうち、ニホンザリガニ以外は外来種で、その代表格が本種。

はさみの表面や側面にイボイボの突起がよく発達しており他種より目立つことが特徴だ。

1927年、神奈川県鎌倉市に食用蛙の養殖用えさとして、アメリカから約20個体を導入。それらが養殖池から逃げ出して繁殖を繰り返し、70年あまりで北海道を含む日本全土に分布を広げた。アメリカ本土の本種に必ずいる寄生虫が日本産には見つからないことから、偶然寄生されていない固体がたった1度だけ持ち込まれ、ここまで分布を広げたと推測されている。脅威の繁殖力だ。しかし、ペットとして人気の本種は人の手で遠隔地へ運ばれるなど、分布拡大は人為的な要因が大きいとされる。

成長すると120mmほどになる暗赤色の体には他のザリガニにも共通する面白い特徴がある。えらは水と空気のどちらからも酸素を吸収できる。肛門から水を飲み、口のそばにある穴から尿を出す。危険に巻き込まれるとハサミの脚を切り離して逃げるが、脚は再生する。食べ物の消化は胃の中にある歯「胃歯」で行う。

水田、小川、池沼など水深が浅く泥底で流れのない水域に生息。繁殖期は春と秋。メスはやや大きめの卵を200～500個ほど産み、粘液で覆われた卵はメスの腹にくっつき房状に下がる。メスはときどき体を前後にゆすって卵に新鮮な水を送る。20～30日でふ化した幼生はしばらく親に保護され、2回脱皮すると自力での生活に入る。秋に田んぼの土手などに穴を掘りそのなかでじっと越冬するが、秋に交尾したメスは卵を抱いたまま越冬する。

雑食性で稲の苗を食害する農家泣かせのうえ、水草群落への影響も甚大、生物多様性の保護上で貴重な日本在来の魚類はじめオタマジャクシ、水生昆虫などが食害されておりその影響も深刻である。日本生態学会は、本種を外来生物の中で生態系や人間活動への影響が甚大な「日本の侵略的外来種ワースト100」に選定し、「野外から排除すべき種という認識を強化・普及すべきである」としている。

参考文献：『ザリガニの博物誌』川井 唯史著 2007年 東海大学出版会刊  
『ザリガニはなぜハサミをふるうのか』山口 恒夫著 2000年 中央公論新社